

学ぶ

Relay Column

EYES

ラッパー

ダースレイダー



ラップは国際秩序のヒント

1日付で、国立民族学博物館(大阪府吹田市)の特別客員教員に就任した。大学を中退してラッパーになった身に教員の肩書がつくのも面白いと思うが、実はラッパーになったからこそこの展開である。

教員として参加するのは、辺境ヒップホップ研究会。主に非英語圏の国や地域において、米国発の黒人中心の文化であるヒップホップがどう普及し、展開していったかを調査し、発表する。研究者たちはこれまでにモンゴルやパレスチナ、ウクライナ、インド、中国、ポーランドなどのヒップホップをテーマに、特にラップ表現を中心に発表していて、とても興味深い。僕は、ラッパーとしての経験に基づいて議論に参加している。

あらゆる地域のヒップホップを見ていく中で浮かび上がってくるのは、「抵抗の文化」としての側面だ。政治権力や宗教権力、社会的慣習などによる抑圧に、言葉で、そして態度で抵抗していく。直接的な物言いから隠喩まで、方法は地域の状況によっても異なるが、ビートの上で言葉をリズムに乗せて演奏するラップの構造は共通する。ラップは多くの場合一人称の表現で、ラッパー自身の言葉として歌われる。ただ、それがリズムに乗ってビートに乗ることで、大勢の人に共有される。個人としての抵抗の言葉が、皆の抵抗の構えにつながっていくのだ。

昨今の国際情勢は、国民国家という大きな単位による秩序形成の困難さを示している。そんな中、僕はヒップホップの、同じビートのリズムに乗りながら言葉をシェアしていく構造は、これからのヒントになると思っている。今後の研究会がとても楽しみだ。

教員と共有「飾り」にしない

学校ごとに立てている教育目標は、その学校が児童・生徒に「どんな子に育ってほしいと考えているか」を示している。ただ、多くは抽象的な内容で、教員や児童には意識されにくい。そんな状況を変えようと、愛知県長久手市の長久手小学校は2023年度、教育目標を実際の授業にリンクさせる取り組みを行い、24年度の新たな教育目標を作る際には、教員から募った意見を盛り込んだ。教育目標を、単なる「飾り」にしない取り組みは、各地で広がっている。(加藤祥子)

同校の22、23年度の教育目標は「夢と希望をもち、進んで学び、挑戦し続ける長小の子」。森田浩喜校長が赴任した翌年度に考案したが、各教員にまで浸透していないと感じていた。23年度は、「学校教育目標を軸とした一人一人の子どもを主語にする学習環境づくり」をする市のモデル学校教育目標。各学校が教育の計画を編成する際の基本となる目標。新学習指導要領の解説では、各学校が直面する教育課題の解決を目指して設定することが重要としている。ただ、長く変えていない学校もある。

「教育目標」授業とリンク

自分の頑張りを認められるように、内田教諭が作った授業の振り返りシート(一部画像処理)

「〇」にした。自己評価は昨夏ごろから導入したが、同じく6年(同)の小岩拓光君は、評価が良いときには、テストの点も比例して高くなると感じるといい「自分のことを理解できてきた」と自信を見せた。

長久手小の取り組みについて、大阪教育大の田村知子教授は「カリキュラム・マネジメントの優れた実践だ」と評価する。カリキュラム・マネジメントとは、教育目標の実現に向けて学校ごとに教育課程を編成し、評価、改善していくことで、新学習指導要領では実施を求めている。

立っている子なのでは」と考えた。そこで「自他の頑張り」を認め、表現できるように、国語や社会の授業の最後に、それぞれが自己評価をする時間を設けた。例えば2月の社会科の授業では、「日本とつながりの深い国々」を児童が調べ、タブレット端末でまとめた。内田教諭は、資料を使って説得力を持たせると良いなどとポイントを紹介。児童たちは授業の最後に、それを実践できていたかを振り返った。

29人の声を反映 24年度の新たな教育目標を作る際には、子どもたちをどう育てるかを教員全体で意識できるように、各教員が考えた「理想の子ども」の姿を盛り込むことに。29人の教員から集めた81のキーワードを管理職らが集約し、最終的に森田校長が「他者を尊重し、自律・挑戦する長小の子」と決めた。教員一人一人の声を教育目標に反映したことを、内田教諭は「目指す方向に、みんなに向かっていく感じがする」と評価し、気を引き締めた。

こうした取り組みは各地でも進む。京都市の葵小学校では、教育目標を教員らで見直し、具体的な内容にして児童とも共有。授業で単元などを終えた後、どんな力がついたかを、児童自身が振り返っている。山口県では中学校区ごとに、地域住民や学校関係者が「目指す子ども像」を共有し、連携して熟議している。

日本とつながりの深い国を調べ、タブレットなどでまとめる児童たち。この後、教員の助言に基づいて作成できたか、「自分の頑張り」を自己評価した(一部画像処理) = 2月、愛知県長久手市の長久手小学校で



育ってほしい姿を具体化

長久手小が年間を通して行った取り組みは、教員研修などを手がける一般社団法人「ひらけエデュケーション」(名古屋市中)の代表理事、服部剛典さん(46)が支援した。年6回の研修や、子どもたちが主体的に学ぶ先進校の視察を企画。教員らの研究授業を見て、助言もした。抽象的な教育目標を教員が意識できるよう、子ども

もたちに育ってほしい具体的な姿に言い換える時間を設け、学期ごとに直しを図った。23年度に2年の担任だった花本菜々教諭(25)は「いつもは日々の授業で精いっぱいだが、研修は子どもたちのことをじっくり考える時間になっていた」と語った。服部さんは「振り返ることで、子どもに合った改善ができる」と狙いを話す。

教員の研修 民間講師が支援

研修は、心理学と脳科学の知見も生かしている。子どもたちが自信を持つ感覚を、教員もつかむため、「集中力がない」などといった欠点をポジティブな表現に変換する練習をしたり、自分の長所を見つけて賞状に書いたりする体験も盛り込んだ。森田校長は「教員だけによる研修では、限界がある。民間のノウハウで、学校に新しい風が吹いた。研修を終えて、教員が学校教育目標を意識しているなと感じる」と意義を語った。